

---

# 流星のロックマン 「神の雷」計画

赤い水性ペン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

流星のロックマン 「神の雷」計画

### 【Nコード】

N3859H

### 【作者名】

赤い水性ペン

### 【あらすじ】

地球を3回救ったスバルたちの前に新たな脅威が・・・

## 第1話 いつもど通りの放課後

西暦22xx年、地球は3回ほど滅ぼされかけるといふ事件がおきた。

1つ目はFM星人の地球侵略……

2つ目は古代文明‘ムー’の攻撃……

最後は、巨大なノイズの隕石‘メテオG’

それらはどこにでもあるような普通(?)な少年とその仲間の活躍により解決された。

だが、まだ彼らはまだ知らない……

地球に新たな危機が迫っていることを……

- 地球(コダマ小学校) -

キン・コーン・カーン・コーン

「おっと、今日はここまでだな。白金」

「はい！起立！例！」

「」「」「さようなら」「」「」

「気をつけて帰れよ。」

「~~~~い」

「スバル君、一緒に帰ろうよ。」  
ツカサがスバルに話しかける。

「もちろん。委員長達も帰ろうよ。」

「私達は遠慮しとくわー!!」

ゴゴゴゴゴゴ~~~~

ものすごい地響きとともに委員長が返事をかえした。

先日たまたまミソラが出演してたテレビの会場でウイルス事件が発生した。

そのときたまたま近くにいたスバルがロックマンとしてウイルスを全消去したのだ。

ミソラ（ハープ・ノート）とともに戦つてるところを全国放送でながされたわけだ。

つまりルナという「愛しのロックマン様」が他の女と仲良く（？）戦っている所を

全国民がみていたわけでした、委員長も例外でないためはげしくい

「は、はい、す、すみませんでした。（怖い!!）」

地球のヒーロースバルでさえこれは恐ろしい……………

「ゴン太!!! キザマロ!!! 早く行くわよ!!!」

「は、はひいゝゝゝ」

三人はさつさと帰ってしまった。

ここからある事件が発生する・・・・・・

## 第1話 いつもど通りの放課後（後書き）

初めての作品なのでよくわかんないところもありますが暖かい目で  
見守っていただければうれしいです。

## 第2話 帰り道

スバルとツカサは下校中だった……………

特に話もせず沈黙のままだった……………  
だが、ツカサが沈黙をやぶる。

「ねえスバル君…………。君はまた地球に危機がせまったら戦うの？」

驚きの発言だ……………

「突然どうしたの？そんなこと聞いて……………」

「いや…………ちよつと聞きたくて……………」

「ま、まあ皆が僕を、ロックマンを信じてくれる限りどんな敵とも戦う覚悟だよ。」

なんかかつこいいことを言ってみた…………スバルにも自覚があった。

「そつか…………そのときは僕も手伝うからね。」  
またまた驚きの発言……………

「へ……………」  
わかっているが一応確認しておく。

「だから、ぼくも君たちと戦うよ!!」

「・・・・・・・・」

「僕もそろそろ一人で見てるのがいやになってきたんだ。」

「・・・・・・・・」

「いつも嫌な思いをするのはきみばかりだった。」

「・・・・・・・・」

「だから僕も君たちと一緒に戦いたいんだ。」

「・・・・・・・・（いつものツカサ君じゃない・・・・・・・・）」

そのうちスバルの頭には「そうか、夢を見てるのか」という答えが出てきた。

「そ、そうゆうことなら・・・・・・・・一緒に戦おうね・・・・・・・・」  
スバルはどうせ夢だと思ったから適当に返した。

「あ、そろそろ行かなきゃ、じゃあね!!。」

ツカサはウェーブライナーで帰るため先に行ってしまった。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」



「・・・ねえ、ロック。ほっぺつねって。」  
夢かどうか確かめる時のお決まりである。

「いいのか？」

そして今回初登場のウォーロックは出番が少なくいらついていた。

「うん」

「じゃ、遠慮なく。」

ウォーロックは思いつきリスバルの頬をつねった。

「いったゝゝゝい！！イタイイタイイタイゝゝゝ！！」  
当然である。

「おっと、チイと力入れすぎた・・・。すまねースバル。（わざとだぜ！）」

ウォーロックのいい気分転換・・・（ストレス解消法Ⅱ戦い？ってかこれはいじめ？）

「ひどいよー、いくらなんでも力いれすぎゝゝゝ。」

「帰ろうぜ！！」

「話を流すな・・・ってもうこんな時間？早く帰らなきゃー。」  
時間という存在を忘れていたスバルはダッシュで家に帰っていった。



## 第2話 帰り道（後書き）

はのぼのしすぎもつまらないので早速動きをだしてみました。  
けどなんか納得いかない・・・。  
なにかアドバイスあったらどんどん言ってください。

### 第3話 戦いの予感

スバルは家についていた。

ソファーに座ってテレビを見ていた。

適当にチャンネルを回しているとミソラ関連の番組がやっていた。司会者が今話題の人に聞きたい10の質問を問いかけまくるというものだ。

司会者は、相手が誰であろうと容赦なく質問を問いかける。今まで何人もこの番組の犠牲者が出た……。

「では、ミソラさんに質問です。ズバリ、恋人はいますか？」

「……いきなりですか!？」

確かにはじめからこれだと考えてしまう……。

「うーん、いるといえはいて、いないといえはいなくて……」

「秘密ですか?じゃあ次の質問です。」

「スバルさんとの関係はどこまで……」

ブ~~~~~

スバルが飲んでたお茶を噴出すのも無理ない……

「たまに一緒に遊びに行く程度です……」

ミソラが若干顔を赤らめて答える……

「つまりデートですか。いいですねー青春は……」

ゲホ、ゲホ・・・・・・・・・・  
スバルが食つてた菓子をとどに詰まらせてもしかたあるまい・・・・

「デ、デート・・・・・・・・」

ミソラは真つ赤だが見ているスバルは今にもメルトダウン（核爆発）しそつだった。

そして硬直しているスバルをいつの間にかとなりにいる茜がつつついていじめる。

「スバルもなかなかやるわね!!」

それをみていつの間にかウィザードONしていたウォーロックが・・・・

（スバルのオフクロ‘度S’だ・・・・・・・・）

と小声でつぶやく。

ついにたまりかねたスバルはテレビを消しぐったりしながら部屋にいつてしまった。

ウォーロックも付いてく。

部屋に着いたスバルはぼつたりとベツトに倒れこみブツブツ言っていた・・・・

（あゝつまんね）

と思ったウォーロックは外を散歩することにした。

- - - 白金 ルナ視点 - - -

家に着いたルナはぱったりとベットに倒れこみどす黒いオーラを発していた……

「あゝゝム力つく!! なんだあのハープ・ノートとか言うのがロククマン様と……」

「私は会うことさえほぼ無理なのに!!」

当然ルナはハープ・ノート（ミソラ）に激しく嫉妬していた。

「私に力があればあんな女ぶっ飛ばしてロククマン様を独り占めできるのに……」

「その願い、かねえてさしあげましょうか？」

その声とともに光が現れ徐々に人のような形になる。そしてそこには……

「アナタはなに？」

「おっと、失礼しました。私はアルテミス。弓術、狩猟、清浄をつかさどる月神です。」

「その月神がなんのよう？」

「アナタに復習のチャンスを与えます。」

「な、何のことよ!!」

「つまりアナタの夢をかなえて差し上げるということです。」

「素晴らしいアルテミスが弓を放った……」

「そして近くの電脳の電波君にあたった……」

「いったくしい……ってあれ体に変化していきます!!ぎゃあ  
あアアあ~~~~!!」

「電波君の形が長くなっていく……まるで蛇のように……  
そして光の中から見たことある奴が……」

「ふふふ……力が湧き上がってくるようだ。」

「光の中からなんとオヒュカスのような奴がでてきた。」

「な、なんなの?」

「私は、オヒュカス・ネオだ。」

「オヒュカス・ネオよ、そのものに力をかけてやりなさい。  
そういうとアルテミスは消えてしまった。」

「わかった。」

「さ、行きましょう……」

「ど、どこえよ!?!」

「アナタの敵のところえよ。」

┐  
.  
.  
.  
.  
.  
.  
.  
.  
.  
.  
.  
.  
└



### 第3話 戦いの予感（後書き）

う~~~~んいまいち面白みがたりない.....

## 第4話 暇つぶし

「外にきてもつまらんもんわつまらん!!」

することもないので散歩をしていたウォーロックは結局のつまらなさにイライラしていた。

「スバルがいればウイルスどもを蹴散らして・・・こう、ぼか～～んと!!」

ウォーロックが思いっきりこぶしを振るとたまたま当たった電波君が・・・

「いたい～～～。なにするんですか!!? っていうかとめて～～!!」

飛んでいった・・・。。。。。

（おっと、まずい、ミスったわ・・・こういう時は無視がいちばん。）

逃げた・・・。（ウォーロックが）

「こら～～この人でなし～～～～!!」

（俺もお前も人じゃないだろ・・・。。。。。）

ウォーロックはそう思いながらも飛んでく電波君を笑顔でみおくっていた。

「この電波体なし～～～～～～～～」

今度こそ見えなくなつた・・・。。。。

（それはもはや日本語じゃないだろ・・・。。。。）

笑顔で見送るウォーロック・・・・・・・・

「まいつか!!」

・・・・・・・・。。

「で、話を戻すと・・・・・・・・（以下略）」  
独り言をがんばるウォーロック。

「で、ウイルスをこう、アップでズコ～～んと!!」  
（なんか手ごたえが・・・・・・・・）

「いたいよ～～。なにをするの～～。あ～～」  
飛んでた・・・・・・・・電波君が飛んでた・・・・・・・・

（またかよ・・・・・・・・）

「このBAK @?%\$&#～～～～」  
なんていったの？

（ついに言葉を越えた・・・・・・・・）  
笑顔で見送る・・・・・・・・

「なんか突っ込んでばっかだ・・・・・・・・」

「さて、そろそろ帰るかな・・・・・・・・」

そして一歩踏み出すと・・・・・・・・

ウゲ!!

電波君を踏んでいた……

（よし、むししてかえる！！なにがあっても帰るぞ！！）

「なにするんですか！！この　カ野@&ゴリア\$#¥こん&くし  
よう！！」

（おまえもか……。いかにいかに！帰らなければ……。・  
）

そして家に着くまで数々のハプニングがあつたけれどなんとか家に  
たどりついたとさ……

## 第5話 つまんね〜

(ハア〜〜〜〜〜〜〜〜・・・つまね〜〜〜〜〜)

「ロック、さつきからそれしかいつてないじゃないか。すこしだまってよ。」

スバルの言ったとおりロックは家についてから3分おきに同じセリフを言っていた。

(しょうがね〜だろ!!つまね〜んだから!!)

「知らないよそんなこと!!まったく!」

(お前は同じ本を1億回もよんでも飽きないからそんなことがいえるんだ!!)

「じゃあさロックも本読んでみたら?」

(んなめんどいことできるか!!)

「じゃあもう一回外散歩してくれば?」

(いやだね!!)

「なんにもしたくないならだまってよ」

(るせ〜〜〜〜!!)

「ロックもだよ」

「ス〜バル〜。ご飯よ〜。」

スバルの母（茜）がスバルを呼ぶ。

スバルはロックをほっというて下に下りてしまった。

（……………）

ウォーロックも無言で降りてゆく。

このアト二人は次の日の朝までしゃべらなかった……………。

~~~~~  
~~~~~

「アルテミスよ！信じてよいのだな！！」

「はい、???様。あの女使えそうです。今頃暴れていることだし

「よう」

「???さんなんて人はいません。モザイクみたいなモンです。そのうち誰かわかるかと・・・」

「そうか。???例の武器のチャージはどれぐらいできている?」

「上の???も同じく。」

「あと70・66478%です。おそらくあと3ヶ月はかかるかと・・・」

「急がせろ!!」

「はい!???様!!」

「各員戦闘配置に付け!!これより第1次地球侵攻作戦を開始する!!」

「「「「ハ!!」」」」

## 番外編1話 ミソラの誕生日

「おじゃまして〜〜す」

「あらいらっしやい、ミソラちゃん」

今日はミソラの誕生日。（8月2日がミソラ誕生日）

ミソラはスバルに誕生日パーティーに呼ばれたのだ。

だが今星河家にいるのはミソラ以外に茜と暁とスバルしかない。

みんななぜか今日に限って忙しかったようだが暁は仕事をサボってきたようだ。

「ミソラちゃん、ちょっと待っててね。そろそろスバルが・・・」

「

「母さん、ドアあけて！」

茜が言い切る前にスバルの声がドアの向こうから聞こえる。

「はいはい」

ボタン

「暁さん席について！ あと例のものもって！」

「はいよ！！」

みんなじたばたしている。



（ちゃんと準備しとけよおい！！）

（うるさいわよ！ウォーロックあんたまた雰囲気壊したら今日こそデリートするわよ！！）

（お前じゃ俺はたおせねーだろ！！）

（う、うるさいわよ！あんたこっち来なさい！！）

（う、ウワアア~~~~！助けてくれスバル！！）

こっちもこっちでじたばたしている。

そして茜が部屋の電気を消す。

「母さん！真っ暗すぎだよ！」

「ほらほら！いいからきをつけて。」

スバルは持ってきたケーキを真っ暗な部屋の中がんばってテーブルの上に配置した。

そして暁がのろうそくに火をつけた。

なんだかんだいって実を言うとミソラ以外全員暗視スコープをしていた。

なのでミソラだけ何が起きているかわからず暗闇の中きょんとしていた。

だがろうそくで若干明るくなった。

「うわ~~~~！おいしそうなケーキ！！」

イチゴと生クリームたっぷりのケーキだった。  
そしてミソラ以外が誕生日の歌を歌いだす。  
歌い終わると部屋が明るくなった。

そしてミソラ以外がクラッカーをパンパンならしていた。  
暁だけはなぜか美味い棒をもっている。

「ミソラちゃん！お誕生日おめでとう！！」「」

「みんな！ありがとう！」

ミソラは目が潤んでいた。

「それにしても暁さんはなぜに美味い棒をもってるの？」

スバルが気にしていたことを聞いてみた。

「例のものってこれだろ？」

「ちが~~~~う！！ 暁さんが食いたいんでしょ？」

「まあ二人とも落ち着いて！」

「とりあえずケーキ食べるわよ！」

「やった~~~~！！」

一番に反応したのはミソラだ

「そのケーキはスバルが作ったのよ〜」  
茜がいろいろ説明し始めた。

「そうなんだ！じゃあいただきます。」

一番にミソラが食べた。

「おいし〜！！ スバル君のケーキおいしいよ〜！！」

「じゃあ私たちもたべますか」

「いただきます」

みんなフツに食べてたが暁はケーキに美味い棒をぶっさしてクリームたっぷりの美味い棒をまずさいしょに食べていた。  
しばらく楽しく話していた。

だがほとんど暁が美味い棒の素晴らしさについてのスピーチをしていた。

後はスバルが暁に仕事は大丈夫なのかきいたらサボってきたことは  
いはないでくれよ、  
しごとつまんね〜からさ・・・といった感じの話をした。

「さあプレゼントタイムよ！」

茜の声とともにスバルがどっか行ってしまった

「スバル君どうしたんですか？」

「ああ、ちよつとね……………」

「まあいいや」

「はい。ミソラちゃん私からはこれ」

茜が包装紙にくるまれたものをミソラに渡す。

「わっっ洋服だ！！ サイズぴったりです！！ アリガトウございます」

中身はピンク色の洋服が入っていた。

「やっぱりサイズはスバルと同じね！」

「じゃあ俺からはこれ！」

暁はでっかい箱を渡す。

「・・・・・・・・・・なにこれ？」

「ん？ これは美味い棒1年分だ。12種類入ってるぜ！」

「じゅ、十二種類も・・・・・・・・・・」

「ああ！明太子・カレー・チーズ・サラダ・コーンポタージュ・チョコ・たこ焼き・しょうゆ

ミソ・豚骨・豚キムチ・ドネルケバブの味が全部合わせて365本入ってる。」

たこ焼き以降のはじっさいにはありません。

「す、すごい………」

（どんな入手経路が………）

ミソラが疑問に思っているとスバルが帰ってきた。

「あ、スバル君！ どこ行ってたの？」

「プレゼントとりにいったんだよ。はいこれ」

スバルは袋をわたす。

「あけていい？」

「うん！ いいよ！」

「わあ！ これって………」

袋の中からはスバルのペンダントと同じ物が入っていた。

「専門の業者にたのんでレプリカを作ってもらったんだ。お守りにもっててよ」

「うん！ だいじにするね！」

「スバルったら、息のいいもの渡すわね〜」

その後も話がつづいた。

「さて、そろそろ俺はかえるから」

「じゃあね暁さん」

「アリガトウございました暁さん」

暁は帰っていった。

「じゃあ私もあしたドラマの撮影なんで」

「あらそうなの？もつとゆっくりしてっていいのよ？」

「いいえ、おそくなるといけないし。」

「そうね、じゃあスバルおくってあげなさい！」

「は〜い。じゃあいこうミソラちゃん」

「うん！-」

~~~~~

「スバル君今日はありがとう」

「いいよべつに、それにブラザーとして当然のことをしてただけだよ」

「うん！-」

「あ、バス来たよ」

「うん、じゃあね」

「じゃあね」

ミソラをのせたバスは出て行った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「さて帰るか・・・・・・・・・・」

スバルも帰っていった。

## 第6話 なぜに？

時は流れて2日後。

「委員長どうしたんだろう？最近委員長学校きてないね。」

（ついにあのドリルも不登校か？）

「まさか。かぜかなんかでしょ。こんどお見舞いにいこうか？」

その時だった。

いきなりスバルのハンターがなりだした。

「あ、メールだ・・・ミソラちゃんからだよ」

（ケツ）

メールを読み上げるスバルの顔がマジだった。

（どうした？大丈夫か？スバル）

「スピカモールでオヒュカスがあばれてるって！！」

（何だと！？）

「大変だよ！前より強くなってるんだって！」

（マジか！？）



「早く行こう!」

(腕が鳴るぜ!—!)

「そっち?」

(気にするな)

「.....」

~~~~スピカモール~~~~

「ハア.....ハア.....」

(ミソラ!大丈夫?)

「だ、大丈夫.....」

ダメージはあまり受けていないが動きすぎで疲れきっているようだ。

(すぐスバル君が.....来たわよ.....)

「ごめん!まった?」

「平気だけでもこのエリアには敵はいないよ.....」

「遅かったか………で……大丈夫？」

「うん……応平気……たぶん……」

「たぶん！？」

「大丈夫だよ。」

「よかった……」

「オヒュカス……委員長だった……」

「……」

「……」

「どえ〜〜〜〜！！！？なぜに？」

## 第6話 なぜに？（後書き）

1ヶ月ぶりです。

このところ学校がテスト多くて……………

6年生にもなると学校いそがしいですね……………

ついでに執行部だし……………

宿題も多くなって降りますゆえ、これからもあまり投稿できないかもしれません……………

まあ

そこそこ

ヨロシク

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3859h/>

---

流星のロックマン 「神の雷」計画

2010年10月10日01時18分発行